

戦略的創造研究推進事業  
(社会技術研究開発)  
平成25年度研究開発実施報告書

研究開発プログラム  
「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」  
研究開発プロジェクト

「『仮設コミュニティ』で創る新しい高齢社会のデザイン」

大方潤一郎  
(東京大学大学院、教授)

## 目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の要約	2
2 - 1. 研究開発目標	2
2 - 2. 実施項目・内容	2
2 - 3. 主な結果	3
3. 研究開発実施の具体的内容	3
3 - 1. 研究開発目標	3
3 - 2. 実施方法・実施内容	4
3 - 3. 研究開発結果・成果	6
3 - 4. 会議等の活動	10
4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	12
5. 研究開発実施体制	13
6. 研究開発実施者	14
7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	18
7 - 1. ワークショップ等	18
7 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	18
7 - 3. 論文発表	19
7 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	19
7 - 5. 新聞報道・投稿、受賞等	21
7 - 6. 特許出願	21

## 1. 研究開発プロジェクト名

「仮設コミュニティ」で創る新しい高齢社会のデザイン

## 2. 研究開発実施の要約

### 2 - 1. 研究開発目標

大槌町及び比較対象地である釜石平田運動公園仮設住宅地及び遠野市の仮設住宅地において、各仮設住宅地におけるコミュニティ再形成とコミュニティ活動開始のための基盤づくり（行政・関係公共機関・関係団体の連携体制づくりを含む）、入居初期の住民の心身状態や復興意向の調査、住民共助型コミュニティ活動の試行に向けての住民のエンパワメント等、主要な活動を本格実施していく。特に大槌町においては、これまでの取り組みを仕組み化し、大槌町の第2期復興実施計画での位置づけや制度化・仕組み化についても検討し、本研究の主目的である仮設コミュニティの社会的・空間的デザイン・モデルの構築と指針化を目指す。

### 2 - 2. 実施項目・内容

#### 仮設住宅地における自治組織（住民協議会等）の継続的支援

- ・各仮設住宅団地について、住民自治組織（住民協議会等）の組織化が不十分な団地への支援の実施。
- ・行政と連携して、制度的・財政的な活動支援体制の構築を支援。
- ・大槌町にて復興戦略会議の設置と、第2期大槌町東日本大震災津波復興計画（基本計画）の策定を支援。

#### 様々なコミュニティ活動（特に住民共助型活動）の推進支援

- ・大槌町安渡地区および釜石市平田地区において住民共助型のコミュニティ活動のファシリテーションと支援を実施。
- ・大槌町にて、コミュニティ活動の支援に関心のある大槌高校の生徒らと協力した、大槌高校生によるコミュニティ戦略策定プロジェクトを実施。
- ・コミュニティ活動やコミュニティ・ビジネスを支援・促進するための体制づくり。

#### 各仮設住宅地における住民の身体的・社会的活動度とQOL（心身健康度）状態の調査

- ・異なるタイプの数カ所の仮設住宅団地について、定期的に、住民の身体的・社会的活動度とQOL（心身健康度）状態を調査し（訪問調査・一部留め置き調査）を実施。
- ・大槌町にて月に1度開催される被災者支援会議に出席し情報交換を行う。

#### 大槌町版介護予防体操DVD作成に基づく介護予防体操の普及・啓発事業

#### 空間的・社会的コミュニティ・インフラに関する住民ニーズの把握と整備改善の支援

- ・大槌町にて仮設住宅地の外観的（空間実態と空間利用状況概要）悉皆調査
- ・岩手県内に整備された、サポートセンターについて悉皆調査
- ・大槌町にて、当該プロジェクトについて評価すべく、  
<空間形態・人間行動・社会関係>の3項関係に着目し、介入型調査とあわせ、ヒアリング、満足度調査を実施した。

## 2 - 3. 主な結果

- ・調査の結果、仮設住宅地には、集会場・談話室等のコミュニティのための空間があることで、コミュニティ活動が活発になることがわかった。またこのような空間の上で、H23年度、H24年度に住環境点検活動を実施したが、この活動を経てコミュニティ活動のファシリテーションを行った自治組織は、その後も活発なコミュニティ活動が行われていることが明らかとなった。
- ・大槌町安渡地域では、コミュニティ活動に対する専門家派遣や助成支援等を行うことで、コミュニティの小さな取り組みを支援し、コミュニティベースの復興まちづくりにつなげていくことが出来た。
- ・釜石市平田地区では、まちづくり協議会の下、コミュニティカフェにとどまらず、地域通貨の活用や、自ら申請書を書いて岩手県の活動助成プログラムに申請したりと、自発的な取り組みが進んでいる。
- ・大槌町総合政策課内にコミュニティ班が設置され、活動助成等の試行プログラムを実施することができた。コミュニティ活動のファシリテーションに関するノウハウおよび仕組みを蓄積することができた。H25年度後半には、役場主導で災害公営住宅の自治組織立ち上げが行われ順調に進んでいる。
- ・またH25年度後半からは町内10地区での地域復興協議会が始まり、より本格的な地域づくりの体制も整備された。
- ・これら取り組みを一過性のものとするのではなく、正規の復興プロセス上で行うために、昨年度から提言してきた大槌町復興総合戦略が本年度策定されることとなった。H25年8月に総合戦略会議が設置され（委員長：大方潤一郎）、ソフトとハードが一体となったコミュニティの復興戦略がまとめられた。この策定過程で、これまでRISTEXで進めてきたコミュニティづくりのアイデアやノウハウを提案し、集会場談話室の整備や次世代地域包括ケアの推進などが盛り込まれることとなった。

## 3. 研究開発実施の具体的内容

### 3 - 1. 研究開発目標

- (1) 仮設住宅地におけるコミュニティの再生
  - ・（H23）仮設住宅地のコミュニティ再生の核となる自治組織を立ち上げ、住民同士の共同生活のルールや地域の課題などを共有する。
  - ・ （H24～）自治体側にコミュニティ・マネジメント支援体制を構築し、自主的な各種会合、イベント、共同作業等の企画・運営を通じて、コミュニティの人間関係を実質的に育成する。
  - ・（ゴール）リーダー的役割を担える住民に、コミュニティのマネジメント役を委ねていく。
- (2) 住民自身の活動を通じたコミュニティ・インフラ整備
  - ・（H23）仮設住宅地の住民自治組織の地域連合組織となる「仮設住宅地運営協議会」を設置し、行政、近隣の既存集落自治会代表者、保健・医療・介護関係者、地元商工業者、その他分野の専門家も参加し、仮設住宅地群と既存集落等を包摂する、一定の拡がりをもった地域のコミュニティ協議会を目指す。

- ・ (H24～) この運営協議会の下で、コミュニティの課題発見的・共助的活動を展開していく。
  - ・ (ゴール) 住民のニーズを把握しながら、生活再建のための基礎条件、特にコミュニティ・インフラを整備していく。
- (3) 住民自治組織による復興まちづくり計画策定と仮設コミュニティの継承
- ・ (H24～) 住民自治組織がコミュニティ運営の主体的な担い手となっていくと同時に、本設復興まちづくりに向かって、自らの生活のイメージと、コミュニティ全体の空間的・社会的な復興イメージを喚起し、そのようなイメージに至る道筋を専門家や支援者の力を借りながら構想する。
  - ・ (ゴール) 仮設住宅地におけるコミュニティ・インフラ整備の取り組みは、復興後のまちづくりのモデルともなり、新たな本設復興市街地に継承していく。
- (4) デザイン・モデルの獲得と指針化による国内外への普及
- ・ (ゴール) 以上の過程を整理分析し、次世代型の仮設住宅地コミュニティの物的・社会的なデザイン・モデルを構築し、指針として国内外に発信する。

### 3 - 2. 実施方法・実施内容

- (1) 仮設住宅地における自治組織（住民協議会等）の継続的支援【主に統括チーム】
- ① 特に大槌町の仮設住宅地について、住民自治組織（住民協議会等）の組織化が不十分な団地については自治組織の組織化を支援し、また既に立ち上がった自治組織については、行政（総合政策課コミュニティ班）と連携しつつ、制度的・財政的な活動支援体制の構築を支援し、また住民の具体的な活動についての支援を実施した。
  - ② 大槌町復興戦略会議の設置と、第2期大槌町東日本大震災津波復興計画（基本計画）の策定を支援した。第1期は震災の混乱の中で主にハード建設中心の復興計画として迅速に取りまとめられた。しかしこれらはインフラ整備であり、震災直後「住宅と駐車場しかない仮設住宅団地＝コミュニティ・スペースもコミュニティ・サポート機能も無い居住施設」が林立したような、同様の生活空間が再現されかねない。土木施設や箱物によって出来上がる空間の中で、具体的にどのような住民の生活やコミュニティ活動が展開されることになるのかについての公式なプランを策定する必要があった。そこで、行政機関だけでなく、様々な支援団体や民間企業等によって担われている大槌町における様々なコミュニティ・サポート活動を戦略的・体系的・統合的に実施するための非法的「コミュニティ・アクション・プラン」（イギリスの「コミュニティ戦略」のような仕組みを想定）の策定を昨年度提言し、本年度推進した。本プランは、関係諸団体による協議会において策定するものとした。
- (2) 様々なコミュニティ活動（特に住民共助型活動）の推進支援【主にコミュニティ活動マネジメントチーム】
- ① 平成24年度の活動を通じて仮設団地自治組織との深い関係性を築けた安渡地区を中心に、住民共助型のコミュニティ活動のファシリテーションと支援を実施した。また、安渡地区に関与するNPOその他支援団体（企業を含む）のネットワークを町（支援室）と連携しながら拡充し、住民側のニーズと支援団体側の活動企画とをマッチングし、あるいは複数の支援団体等をコーディネートする体制の構築を支援した。

- ② 大槌町総合政策課内に設置されたコミュニティ班の運営支援を行い、コミュニティ活動やコミュニティ・ビジネスを支援・促進するための体制づくりに取り組んだ。
  - ③ (1)②の大槌町復興戦略の策定にあたり、ハード整備に傾注しているのは行政だけではない。住民もインフラや住宅が整備されれば、自ずとコミュニティは元に戻ると考えている人が多かった。コミュニティ活動の重要性を啓発すべく、コミュニティ活動の支援に関心のある大槌高校の生徒らと協力して、大槌高校生によるコミュニティ戦略策定プロジェクトを実施した。この取り組みをとおして、住民一人ひとりが関わるソフト事業の必要性を、若い世代からコミュニティに問いかけるプロジェクトを行った。
- (3) 各仮設住宅地における住民の身体的・社会的活動度と QOL（心身健康度）状態の継続的調査【主にケアサポート・マネジメントチーム】
- ① 異なるタイプの数カ所の仮設住宅団地について、定期的に、住民の身体的・社会的活動度と QOL（心身健康度）状態を調査し（訪問調査・一部留め置き調査）を行い、コミュニティの中での住民の生活実態（特に社会的活動実態）と QOL（心身健康度）の関係性を把握し、あわせて本プロジェクト等による物的・社会的コミュニティ・インフラの整備改善の効果（たとえば、どれほど高齢者の自立度の維持・向上に貢献したか）を測定評価した。
  - ② 月に1度開催される被災者支援会議に出席し情報交換を実施した。
- (4) 大槌町版介護予防体操 DVD 作成に基づく介護予防体操の普及・啓発事業【主にケアサポート・マネジメントチーム】
- ① 大槌町の高齢者実態把握調査の結果、仮設住宅居住の高齢者に骨粗鬆症が多かった。高齢者の骨折の危険性と同時に身体活動量の低下が懸念されることがわかった。大槌町の高齢者が楽しんでできる介護予防体操を作成し普及することで、高齢者が継続的に運動することを支援した。
- (5) 空間的・社会的コミュニティ・インフラに関する住民ニーズの把握と整備改善の支援【主にコミュニティ空間マネジメントチーム】
- ① 仮設住宅地の外観的（空間実態と空間利用状況概要）悉皆調査を概ね季節ごとに行い、物的施設としての仮設住宅地の問題を把握すると同時に、住民自身による「住みこなし（住戸の改造や外部空間の拡充）」の展開状況を調査した。
  - ② 今回の震災で多数整備された、岩手県内のサポートセンターについて調査を行い、住民がそれをどのように使いこなし、また、そこでどのような社会関係が展開していくかを調査した。
  - ③ 仮設コミュニティづくりの効果測定について、継続的な観察調査を行うとともに、＜空間形態・人間行動・社会関係＞の3項関係に関する介入型調査とあわせ、ヒアリング、満足度調査等を実施した。

### 3 - 3. 研究開発結果・成果

#### (1) 仮設住宅地における自治組織（住民協議会等）の継続的支援【主に統括チーム】

##### ① 自治組織の支援

釜石市平田公園仮設まちづくり協議会においては、定期的な協議会の開催による情報交換が行政と住民の協働により推進されている。また自治会によるコミュニティカフェの運営、コミュニティガーデンの整備、岩手県の新しい公共創造基金を獲得してのコミュニティ放送の実施、地域通貨の実験など、自主的な取り組みが進んでいる。

大槌町においては、H25年度より総合政策課内にコミュニティ担当が設置されて基本体制が整備された。②の大槌町復興戦略会議とあわせて、町内を10地区にわけた地域復興協議会が推進され、各コミュニティでの課題整理や将来展望の検討などの支援が行われた。また制度および資金面での支援として、ふるさと納税を活用した大槌町ふるさとづくり協働推進事業補助金事業（6団体、総額60万）が行われ、また新しい東北創造基金を活用したコミュニティ活動の支援が行われた（11団体約350万円）。H26年度以降も、コミュニティ活動の育成支援を、大槌町として実施していくこととなった。

- ② 平成25年8月から正式に大槌町復興戦略会議（委員長：大方潤一郎）が設置され、第2期復興実施計画の策定が行われた。この計画は、「防潮堤や区画整理など第1期で検討した新しい町の物的基盤施設の上に、どのような新しい町の暮らしと風景を再生していくのか」「町民が共に支え合い、悲しみも喜びも共に分かちあう地域社会をどのように再生し育てていくのか」といったこれからの町民の暮らしを支える大槌町の居住環境や社会的・経済的・文化的環境についての復興方針について、検討したものである。震災復興となると、とかくインフラ整備に脚光が当たるが、インフラとあわせて、町民の暮らしを支える環境を早急に整える必要がある。さもないと、超高齢化、少子化、若年人口の流出などが進む今後の日本において、被災したことで、市民は住み慣れたコミュニティでの生活を続けることができず、やむなく町外に出て行くことになったり、被災後、一時的にコミュニティ外に出ていた市民がコミュニティに戻って来ることが難しくなる。さらに生活環境だけでなく、コミュニティの地域資源と風景を再生し、これを活かした産業を復興し、魅力ある職と生業の場を確保しなければ、住民の暮らしの経済が成り立たない。本プロジェクトの最終生活物として、汎用性のあるガイドラインをつくるにあたり、もっとも重要な取り組みである。第2期復興実施計画において、本プロジェクトでこれまで検討し大槌町に提言してきた、サポートセンターの整備方針、次世代地域包括ケアシステムなどが盛り込まれ、他自治体も参考になる総合戦略となった（下図）。



大槌町第2期復興実施計画

(2) 様々なコミュニティ活動（特に住民共助型活動）の推進支援

【主にコミュニティ活動マネジメントチーム】

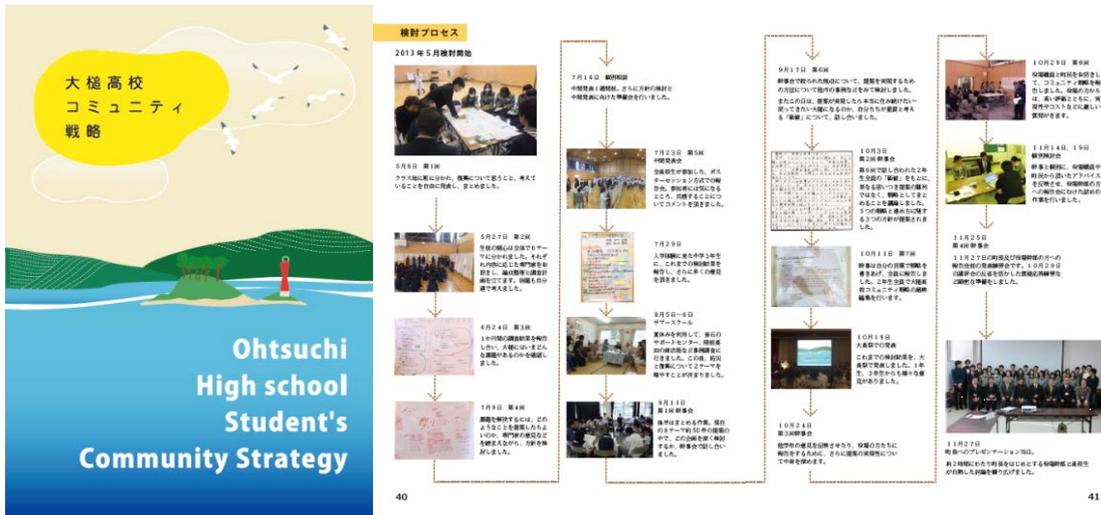
- ① 安渡地域において、コミュニティ活動のファシリテーションを行った。安渡地区は津波被害が大きく、復興にむけた話し合いが熱心に行われている地区であるが、その基本はやはりハード整備に主眼が置かれていた。しかし後期高齢者や若い世代などは、日々の暮らしにくさなどに不満を抱いており、新しいコミュニティづくりを模索していた。安渡地区ではH23年度に住環境点検調査を行い、各集会場・談話室ごとにコミュニティのまとまりをつくり、H24年1月には新しい安渡自治会が発足した。住環境点検等で話し合った住民主導の活動であるノルディックウォーキングの会や各種支援団体による支援などをもうけ、小さなコミュニティ活動が生まれていった。これらを安渡地区のソフトとハードの一体的復興につなげるべく、H25年度は、若い人の参加を促し、地域の新しい人材の発掘を行い、住民がこれからのコミュニティの姿を考えるためのきっかけづくりを支援した。具体的には、町内会と公民館を中心に、実行委員会の立ち上げをコーディネートし、ガリバーマップの作成や演劇を見る会などを行った。約60名の参加とともに、地域に拠点があるNPO子ども夢ハウスおおつちと連携することが出来た。この過程で、安渡娘という郷土の民話をもちいた人形劇グループの立ち上げ、郷土料理をつくる世代間交流会など、活動が広がった。H25年度後半には、第2期復興実施計画策定にともなう地域復興協議会が開催され、若い世代の意見なども踏まえつつ、小さなコミュニティ活動も大切に育てながら、今後の安渡地区について検討することを支援した。
- ② 大槌町総合政策課内に設置されたコミュニティ班の運営支援を行い、コミュニティ活動やコミュニティ・ビジネスを支援・促進するための体制づくりを支援した。具体的には、活動支援制度の導入であり、下記にあげる住民の自発的な取り組みを支援した。



(助成例) 左：安渡娘（地元民話の人形劇）、右：金沢地区協議会（地域資源マップ）

- ③ 大槌高校2年生の総合的な学習の時間を使い、大槌高校生による復興コミュニティ戦略づくりを行った。平成25年5月から11月まで、復興に向けたアイデアを議論、町内を調査し、住民と意見交換を行った。「大槌高校コミュニティ戦略」としてとりまとめ、11月に碓川豊町長や幹部職員に発表した。大槌町は、上述の復興基本計画

へ反映させるほか、高校生が中心となり実施するプロジェクトのために50万円の予算を組むこととなった。復興庁等からの問い合わせもあり、若い世代がコミュニティについて考える優れたプログラムであるとの評価を受けた。本取り組みは、NHK総合（H26年3月9日：震災から3年 「特集 明日へ-支え合おう-」等）でとりあげられた。



(3) 各仮設住宅地における住民の身体的・社会的活動度と QOL（心身健康度）状態の継続的調査【主にケアサポート・マネジメントチーム】

- ① 9仮設住宅団地276戸の20歳以上の住民562人に自記式質問紙調査をおこなった。調査時期；平成24年1月～3月、平成24年10月～12月である。調査結果については、分析中であるが、速報として、仮設団地内で人のつながりがあると回答する者、自治会活動への参加者は増加傾向であることが判った。特に、自治会活動が活発化したことが影響していることがわかった。また生活満足度改善傾向にある。団地の暮らしやすさに変化はないが、人とのつながりができ、生活に慣れたこと、各種支援への満足感が理由と考えられる。他方、健康状態、精神的健康には有意差がみられず、若干悪化傾向にあると考えられる。また孤立感を感じる者が優位に増加している。この要因については、現在分析中である。

3.3 コミュニティ環境点検活動 (QoLシート調査)

- 目的: 仮設住宅住民の健康状態の変化を把握すると共に、健康状態に関連する要因を、主に地域コミュニティの側面から明らかにする。
- 対象: 4地区9仮設住宅団地276戸に住む20歳以上の住民
- 調査時期: 平成24年1月～3月 (Time1:T1)と、平成24年10月～12月 (Time2:T2)の2回実施。
- T2では1地区(非自治会生活者を除く)を改めて調査を実施。
- 平成26年2月～3月 (Time3)を実施予定
- 結果・考察: 団地は人のつながりがあると回答する者、自治会の活動への参加者は増加傾向が認められた。
- 生活満足度の改善傾向が認められた。団地の暮らしやすさは変化がなかったが、人とのつながりができて、団地の暮らしに慣れたこと、各種の支援への満足感などが理由として考えられる。
- 健康状態、精神的健康には有意差がなかったものの、若干悪化傾向が認められた。仮設住宅での生活が長期化するにつれて、身体活動の低下やストレスの蓄積により、悪化する危険もあり、注意が必要と考えられた。
- 孤立感を感じる者が有意に増加していた。多くの支援が入り、助け合いが広がる「人々」へつながり、困難に「連帯する」(互恵)への移行に加え、復興に向かう他人との比較などから、孤立感というより「取り残され感」を覚える者が増えた可能性がある。

	T1	T2	P値
団地の住みやすさの評価			
団地は人のつながりがある (どちらかといえば) そう思う	131 65.5%	140 74.5%	0.027
団地は暮らしやすい (どちらかといえば) そう思う	115 58.4%	110 57.6%	0.876
活動への参加状況			
震災前のご近所での活動	参加あり 15 7.5%	15 7.5%	1.000
自治会の活動	参加あり 44 22.0%	60 30.0%	0.068
団地のサロン	参加あり 58 29.0%	63 31.5%	0.586
主観的健康観・精神的健康			
健康状態 (あまり) よくない	62 31.5%	78 39.2%	0.108
生活満足度 (どちらかといえば) そう思う	67 35.1%	83 43.7%	0.086
孤立感 (どちらかといえば) そう思う	22 11.0%	38 19.0%	0.018
K6得点(0-24点)	75 37.5%	87 43.5%	0.110

自宅生活者と仮設住宅住民の比較: 平成24年10月～11月 (Time2:T2)

- 方法: コミュニティ環境点検 (Time2) を実施の際、地区の自治会の依頼もあり震災前から自宅生活者に対しても同様の調査を実施し、自宅生活者 (在宅) と仮設住宅 (仮設) の住民を比較した。
- 対象地区: 三陸沖津に隣し、震災時約14mの津波が襲ったが、津波の高さのため、大きな被害を受けた津波を被害を受けた家(在宅)がある。在宅は7～8戸程度のまとまりで地区内に点在し、大きな被害を受けた家(仮設)は当該地区の仮設住宅 (仮設) であり、被災地区や町外の仮設住宅等に転居した。今回の調査は、地区内の在宅と仮設の住民を対象とした。
- 結果・考察: 65歳未満 (在宅「仮設」) の住みの違いは、精神的健康に影響しなかった。
- 在宅における「家族からのソーシャルサポート」と、仮設における「ボランティア団体からの支援」が1世代の差となり、住みの違いが精神的健康に影響しなかった可能性がある。
- 65歳以上 (在宅) の住民の方が、精神的健康に問題があった。
- 「在宅」の住民の方が、「健康増進がしたい」や「ボランティア団体からの支援がほしい」という思いを抱いており、孤立感・嫌外感が精神的健康に影響を与えた可能性がある。
- 地域コミュニティの状況に対する認識では、在宅より仮設の住民の方が高い傾向にあった。調査対象地域の仮設住宅はコンパウンド型集合施設等も混在し、仮設になった小学区校舎が使えら、非自治会活動も生活などにより異なると思われる。

精神的健康	65歳未満 (N=74)				65歳以上 (N=59)			
	在宅 (N=49)	仮設 (N=25)	p	在宅 (N=29)	仮設 (N=30)	p		
K6	22 44.9%	12 48.0%	0.800	17 58.6%	9 30.0%	0.027		
ソーシャルサポート(SS)								
家族からのSS(コンパニオン)	あり 41 83.7%	13 52.0%	0.013	17 58.6%	18 60.0%	0.345		
家族からのSS(情報)	あり 45 91.8%	18 72.0%	0.035	23 79.3%	22 73.3%	-		
家族からのSS(情緒)	あり 42 85.7%	18 72.0%	0.081	25 86.2%	23 76.7%	-		
家族からのSS(情報)	あり 38 77.6%	13 52.0%	0.012	20 69.0%	20 66.7%	1.000		
地域コミュニティに対する認識								
地域の人が手助けを必要としていたら、助けてあげたい	41 83.7%	23 92.0%	0.018	27 93.1%	29 96.7%	0.873		
ゴミ出しや駐車場の管理がしっかりと行われている	40 81.6%	21 84.0%	0.470	22 75.9%	28 93.3%	0.041		
集会所 (公民館など) は使いやすい	13 26.5%	9 36.0%	0.210	9 31.0%	23 76.7%	0.000		
安心して子供を遊ばせられる	12 24.5%	14 56.0%	0.001	9 31.0%	9 30.0%	0.007		
ボランティア団体などの支援がいきとじている	15 30.6%	16 64.0%	0.014	12 41.4%	22 73.3%	0.003		

(4) 大槌町版介護予防体操 DVD 作成に基づく介護予防体操の普及・啓発事業

【主にケアサポート・マネジメントチーム】

- ① DVDの作成後、大槌町の地域包括班と連携し、「びんころ体操」として町民による集会等で活用が進んでいる。



DVDの作成風景



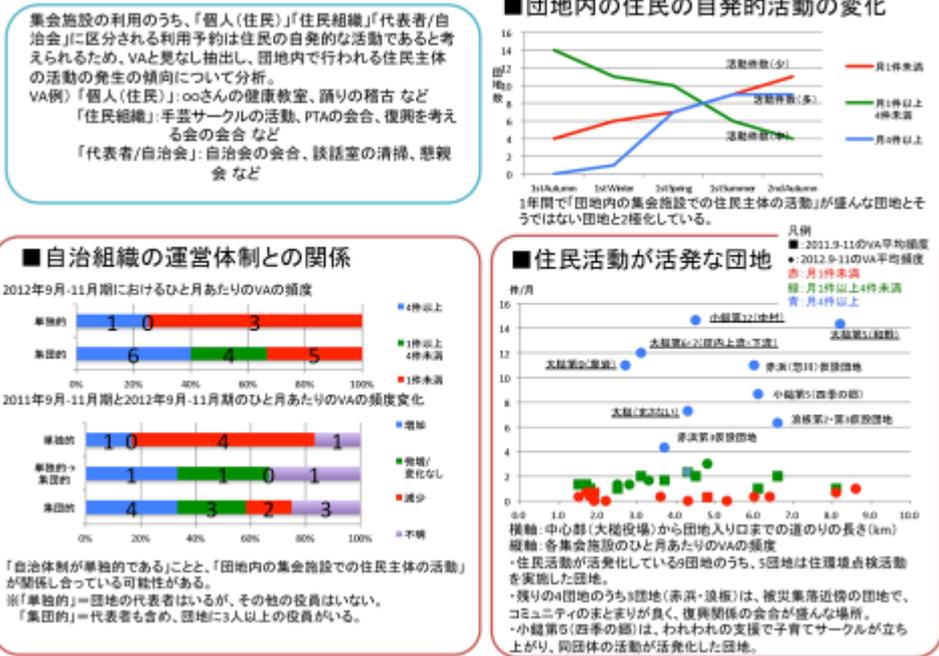
DVDを利用した体操の風景

(5) 空間的・社会的コミュニティ・インフラに関する住民ニーズの把握と整備改善の支援

【主にコミュニティ空間マネジメントチーム】

- ① 仮設住宅地の外観的（空間実態と空間利用状況概要）悉皆調査を実施し、調査は今年度で終了し、物的施設としての仮設住宅地の問題を把握すると同時に、住民自身による「住みこなし（住戸の改造や外部空間の拡充）」の展開状況について分析を始めた。
- ② 岩手県内の27箇所の仮設サポートセンターを調査し、専門家が常駐しておりリハビリや見守りなどを行う「デイサービス型」と住民の自発的な利用が多い「相談サロン型」の大きく2パターンあることがわかった。現在、結果を分析中であり、仮設サポートセンターのあり方について取りまとめている。
- ③ コミュニティ点検調査、空間観察調査、自治組織へのインタビューなどを踏まえて、〈空間形態・人間行動・社会関係〉の3項関係に関して分析中である。現時点で判ったこととしては、集会場・談話室等のコミュニティのための空間が必要であるということ、このような空間の上で、H23年度、H24年度に実施した住環境点検活動といったコミュニティ活動のファシリテーションを行ったところ、われわれの介入があった自治組織は、その後も活発なコミュニティ活動が行われていることがわかった。この活動が（3）①での個人の健康度とどのように関係するのか、次年度明らかにしていく。

### 3.2：仮設団地集会所施設（24件）における住民の自発的な活動状況の分析



### 3 - 4. 会議等の活動

・実施体制内での主なミーティング等の開催状況

年月日	名称	場所	概要
4月	全体会		
4月15日	定例MTG	工学部1号館210号室	会議運営方法、各チームPJのスケジュール調整について
4月22日	定例MTG	工学部1号館210号室	WHO勉強会、大槌町/大槌高校計画策定PJ、安渡コミュニティ活動、サポセン調査結果、健康体操、サイトビジットについて
5月13日	定例MTG	工学部1号館210号室	WHO勉強会、大槌高校WS、建築悉皆調査、コミュニティ環境点検について
5月20日	定例MTG	工学部1号館210号室	WHO勉強会、平田協議会、大槌高校WS、安渡イベント、サポートセンター調査、学会発表について
5月27日	定例MTG	工学部1号館210号室	WHO勉強会、コミュニティ環境点検および報告会について
6月3日	定例MTG	工学部1号館210号室	WHO勉強会、建築悉皆調査の結果、コミュニティ環境点検調査および報告会について
6月10日	定例MTG	工学部1号館210号室	WHO勉強会、大槌高校PJ、平田協議会、安渡イベント、コミュニティ環境点検調査報告会、仮設住宅改修フォロー調査、建築悉皆調査、学会執筆について

6月17日	定例MTG	工学部1号館 210号室	WHO勉強会、コミュニティ環境点検調査、建築悉皆調査、最終報告について
6月24日	定例MTG	工学部1号館 210号室	コミュニティ環境点検調査および報告会、仮設住宅外観観察調査について
7月1日	定例MTG	工学部1号館 210号室	大槌高校PJ、大槌町第二次計画策定、体操DVD、建築悉皆調査について
7月8日	定例MTG	工学部1号館 210号室	建築悉皆調査データ整理、コミュニティ環境点検調査報告会について
7月22日	定例MTG	工学部1号館 210号室	安渡イベント、大槌高校PJ、大槌町計画策定、建築悉皆調査とりまとめ、コミュニティ環境点検調査について
7月29日	定例MTG	工学部1号館 210号室	大槌高校PJ、安渡イベント、遠野仮設・サポートセンター、建築悉皆調査、体操評価のための調査、学会発表について
8月5日	定例MTG	工学部1号館 210号室	コミュニティ環境点検調査分析、仮設住宅外観調査について
8月19日	定例MTG	工学部1号館 210号室	建築悉皆調査分析、コミュニティ環境点検調査分析、自治会調査分析、コミュニティサポート事業、RISTEX報告会について
8月26日	定例MTG	工学部1号館 216号室	建築悉皆調査、住環境点検調査、平田協議会、大槌町計画策定、コミュニティ環境点検調査のデータ統合分析について
9月2日	定例MTG	工学部1号館 210号室	ケース共有会議、大槌高校PJ、学会発表、会議運営について
9月9日	定例MTG	工学部1号館 210号室	陸前高田仮設住宅見学、建築悉皆調査について
9月30日	定例MTG	工学部1号館 210号室	陸前高田仮設住宅見学、建築悉皆調査、学会発表について
10月7日	定例MTG	工学部1号館 210号室	大槌高校PJ、大槌町計画策定について
10月21日	定例MTG	工学部1号館 210号室	大槌高校PJ、遠野市計画策定、サポートセンターPJ、建築悉皆調査について
10月28日	定例MTG	工学部1号館 210号室	PJ全体会、大槌町計画策定および地域復興協議会、大槌高校PJ、コミュニティ環境点検調査結果整理、建築悉皆調査結果整理
11月11日	定例MTG	工学部1号館 210号室	体操イベント、建築悉皆調査データ整理、現地拠点について
11月25日	定例MTG	工学部1号館 210号室	体操DVD制作、仮設住宅インタビュー調査について
11月28日	全体会	工学部8号館7 13	サポートセンターPJ企画、コミュニティケア全国調査、JST打ち合わせ準備について

12月2日	定例MTG	工学部1号館210号室	領域合宿、今後の進め方について
12月9日	定例MTG	工学部1号館210号室	コミュニティ環境点検調査、仮設住宅インタビュー調査、学会発表について
12月18日	JST打合せ	JST東京本部別館4階会議室F	全体進捗について
12月22日、23日	JST合宿		全体進捗について
1月20日	定例MTG	工学部1号館210号室	コミュニティ環境点検調査、仮設住宅インタビュー調査、学会発表について
1月27日	定例MTG	工学部1号館210号室	JST領域シンポジウムの資料作成
2月3日	定例MTG	工学部1号館210号室	JST領域シンポジウムの資料作成
2月10日	定例MTG	工学部1号館210号室	JST領域シンポジウムの資料作成
2月11日	JST領域シンポジウム		
2月17日	定例MTG	工学部1号館210号室	年度内のまとめ方について 予算執行の状況について
2月24日	定例MTG	工学部1号館210号室	年度内のまとめ方について 予算執行の状況について
2月26日	全体会	工学部8号館713	移動暮らし保健室活動企画について コミュニティ活動のファシリテーションについて
3月3日	定例MTG	工学部1号館210号室	最終年度の進め方について 4月以降の調査企画について
3月10日	定例MTG	工学部1号館210号室	最終年度の進め方について 4月以降の調査企画について
3月17日	定例MTG	工学部1号館210号室	最終年度の進め方について 4月以降の調査企画について
3月24日	定例MTG	工学部1号館210号室	最終年度の進め方について 4月以降の調査企画について

#### 4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

- 被災地においては、復興庁、宮城県、福島県などからも取り組みについてアドバイスを求められ、そのつどノウハウの提供を行っている。
- 被災地以外では、神奈川県社会福祉協議会、静岡県など自治体等から、今後の震災対応の事前検討においてアドバイスを求められ、ノウハウを提供してきた。

## 5. 研究開発実施体制

### (1) 統括計画調整グループ

① (大方潤一郎) 東京大学大学院 工学系研究科 都市工学専攻

#### ② 実施項目

- 各事業の統括とマネジメント（進捗状況管理）、本研究開発事業全体の統括とマネジメントを実施。
- 各仮設住宅地自治組織代表者、関係機関、団体代表者等からなる、仮設住宅運営協議会の設置と運営の支援を実施。
- 住民自治組織による復興総合戦略策定について提言、策定支援を実施した。

### (2) コミュニティ活動マネジメント・チーム

① 小泉秀樹 東京大学大学院 工学系研究科 都市工学専攻

#### ② 研究開発実施項目

- 各仮設住宅地の自治組織（住民協議会等）の立ち上げを提案し実現
- コミュニティ活動マネジメントにつながる住環境点検活動プログラムの検討
- 住環境点検WSで指摘された課題について、自治組織が連携して取り組みたいと考えるイベントの支援
- 自治会長や支援団体等へのインタビュー調査を実施（コミュニティ活動・生活再建に対する住民ニーズと各仮設住宅地の人的・物的資源の把握）
- 自治体によるコミュニティ活動のファシリテーションの仕組みづくり、体制づくりを提言し、支援した。

### (3) コミュニティ空間マネジメント・チーム

① (大月敏雄) 東京大学大学院 工学系研究科 建築学科

#### ② 研究開発実施項目

- 自力で対応すべき項目についてはDIYを行うためのアドバイスをまとめた「仮設住宅住みこなし通信」を12月から毎月発行・大槌町民へ全戸配布。
- 仮設団地内で実施された空間整備の効果を、未整備の状態との比較を含め、秋・冬の2回測定・評価した。
- 高齢者等のサポート拠点に関する調査研究
- オーダーメイド型バリアフリー改修の試行

### (4) コミュニティ・ケアサポート・チーム

① (永田智子) 東京大学大学院 東京大学大学院医学系研究科 地域看護学分野

#### ② 研究開発実施項目

- 昨年度開発したコミュニティ環境自己点検シートをもとに、今年度も仮設団地において調査を実施した。
- LSAによる仮設住宅での見守り訪問活動について月1回開催される情報共有のための会議（ケース共有会議）に出席した。

- 大槌町版介護予防体操 DVD の製作に基づく介護予防体操の普及・啓発事業を行った。
- コミュニティ・マネジメント・チームと連携して、移動！暮らし保健室活動を実施した。

## 6. 研究開発実施者 代表者・グループリーダーに「○」印を記載

### (1) 統括計画調整グループ

	氏名	フリガナ	所属	役職(身分)	担当する研究開発実施項目
○	大方 潤一郎	オオカタ ジュンイチロ	東京大学 都市工学科	教授	研究運営統括 (代表)
	後藤 純	ゴトウジュン	東京大学 高齢社会総合研究機構	特任研究員	事業運営統括補佐
	永田 智子	ナガタサトコ	東京大学大学院 医学系研究科	准教授	コミュニティ・ケア
	松永 篤志	マツナガ アツシ	東京大学大学院 医学系研究科	D 2	コミュニティケアチーム 運営補佐
	森反 章夫	モリタン アキオ	東京経済大学	教授	コミュニティ組織
	大月 敏雄	オオツキ トシオ	東京大学 建築学 科	准教授	コミュニティ・スペー ス
	富安 亮輔	トミヤス リョウスケ	遠野市・東京大学 建築学科	D 3	コミュニティ・スペー スチーム運営統括補佐
	趙 晟恩	チョウ ソンウン	工学系研究科 建築学専攻	特任研究員	コミュニティ・スペー スチーム運営統括補佐
	牧野 篤	マキノアツシ	東京大学 教育学 部	教授	コミュニティ・ケア/マ ネジメント
	小泉 秀樹	コイズミ ヒデキ	東京大学 都市工学科	教授	コミュニティ・マネジ メント
	似内 遼一	ニタナイ リョウイチ	工学系研究科 都市工学専攻	D 3	コミュニティ・マネジ メントチーム統括補佐
	新 雅史	アラタ マサフミ	学習院大学	非常勤講師	コミュニティ・マネジ メントチーム統括補佐
	鈴木 るり子	スズキルリコ	岩手看護短期大学	教授	研究運営統括
	狩野 徹	カノウトオル	岩手県立大 社会福祉学部	教授	研究運営統括
	岸 恵美子	キシエミコ	帝京大学 医療技 術学部看護学科	教授	復興計画策定支援

(2) コミュニティ・マネジメント・サポート・チーム

	氏名	フリガナ	所属	役職(身分)	担当する研究開発実施項目
○	小泉 秀樹	コイズミ ヒデキ	工学系研究科 都市工学専攻	教授	グループ統括 コミュニティ事業
	似内 遼一	ニタナイ リョウイチ	工学系研究科 都市工学専攻	D3	コミュニティ活動支 援統括
	金井 利之	カナイ トシユキ	東京大学法学部	准教授	コミュニティの資源 管理支援
	森反 章夫	モリタン アキオ	東京経済大学	教授	コミュニティ組織
	牧野 篤	マキノアツシ	東京大学 教育学 部	教授	生涯学習、子どもの 教育支援
	鈴木 るり子	スズキルリコ	岩手看護短期大学	教授	食事等の生活介助支 援
	新 雅史	アラタ マサフミ	学習院大学	非常勤講師	住民調査・ニーズ評 価・設計・解析
	後藤 純	ゴトウジュン	東京大学 高齢社 会総合研究機構	特任研究員	市民事業
	井堀 幹夫	イホリミキオ	東京大学 高齢社 会総合研究機構	特任研究員	住民自治活動・NP O運営支援
	永田 智子	ナガタサトコ	東京大学大学院 医学系研究科	准教授	高齢者の食生活支援
	後藤 智香子	ゴトウチカコ	東京大学 都市工学科	特任助教	集会場運営支援
	堤 可奈子	ツツミカナコ	東京大学 高齢社 会総合研究機構	特任研究員	コミュニティ活動支 援
	神原 康介	カンバラ コウスケ	工学系研究科 都市工学専攻	D1	コミュニティ活動支 援
	趙 美香	チョウミカ	工学系研究科 都市工学専攻	D1	コミュニティ活動支 援
	フェリペ・ デ・ソーザ		工学系研究科 都市工学専攻	客員研究員	コミュニティ活動支 援
	松田 悠暉	マツダユウキ	工学系研究科 都市工学専攻	M2	コミュニティ活動支 援
	的場 弾	マトバダン	工学系研究科 都市工学専攻	M2	コミュニティ活動支 援
	白澤 翔平	シラサワ ショウヘイ	工学系研究科 都市工学専攻	M2	コミュニティ活動支 援
	今場 雅規	コンバ マサノリ	工学系研究科 都市工学専攻	M2	コミュニティ活動支 援

	三宅 亮太郎	ミヤケ リョウタロウ	工学系研究科 都市工学専攻	M2	コミュニティ活動支 援
	永田 麻由子	ナガタマユコ	工学系研究科 都市工学専攻	M2	コミュニティ活動支 援
	安井真太郎	ヤスイ シンタロウ	工学系研究科 都市工学専攻	M2	コミュニティ活動支 援
	Giancarlo Troncoso		工学系研究科 都市工学専攻	D3	コミュニティ活動支 援

(3) コミュニティ・スペース・サポート・チーム

	氏名	フリガナ	所属	役職(身分)	担当する研究開発 実施項目
○	大月 敏雄	オオツキ トシオ	工学系研究科 建築学専攻	准教授	グループ統括
	富安 亮輔	トミヤス リョウスケ	遠野市・東京大学 建築学科	D3	住環境点検統括
	趙 晟恩	チョウ ソンウン	工学系研究科 建築学専攻	特任研究員	住環境点検統括
	岡本 玲子	オカモト レイコ	岡山大学大学院 保健学研究科	教授	住民調査・ニーズ評 価・設計・解析
	西出 和彦	ニシデ カズヒコ	東京大学建築学科	教授	住宅地設計
	牧野 篤	マキノアツシ	東京大学 教育学 部	教授	子どもケア空間
	狩野 徹	カノウトオル	岩手県立大学 社会福祉学部	教授	福祉施設
	小泉 秀樹	コイズミ ヒデキ	東京大学 都市工学科	准教授	オープンスペース
	廣瀬 雄一	ヒロセ ユウイチ	東京大学 高齢社 会総合研究機構	特任研究員	バリアフリー
	岡本 和彦	オカモト カズヒコ	東京大学建築学科	助教	サポートセンター
	笈田 幹弘	オイダ ミキヒロ	東京大学 高齢社 会総合研究機構	特任研究員	居住環境
	有本 梓	アリモト アズサ	東京大学大学院 医学系研究科	助教	医療施設
	深井 祐紘	フカイ ヨシヒロ	工学系研究科 建築学専攻	D3	住みこなし通信作成
	吉田 雅史	ヨシダマサシ	工学系研究科 建築学専攻	M2	住環境点検調査

	生山 翼	オイヤマ ツバサ	工学系研究科 建築学専攻	M2	住環境点検調査
	栗野 悠	アワノ ユウ	工学系研究科 建築学専攻	M2	住環境点検調査
	朴 晟源	パク ソンウォン	工学系研究科 建築学専攻	D1	住環境点検調査
	齊藤 慶伸	サイトウ ヨシノブ	工学系研究科 建築学専攻	M2	住環境点検調査
	水上 和哉	ミズカミ カズヤ	工学系研究科 建築学専攻	M2	住環境点検調査
	金 昶敏		工学系研究科 建築学専攻	M2	住環境点検調査
	栗原 理沙	クリハラリサ	工学系研究科 建築学専攻	M2	住環境点検調査
	芦澤 健介	アシザワ ケンスケ	工学系研究科 建築学専攻	M2	住環境点検調査
	篠本 快	シノモトカイ	工学系研究科 建築学専攻	M2	住環境点検調査
	井本 佐保里	イモトサオリ	工学系研究科 建築学専攻	D3	住環境点検調査

**(4) コミュニティ・ケア・サポート・チーム**

	氏名	フリガナ	所属	役職（身分）	担当する研究開発 実施項目
○	永田 智子	ナガタサトコ	東京大学大学院 医学系研究科	准教授	グループ統括
	寺本 千恵	テラモトチエ	東京大学大学院 医学系研究科	D1	コミュニティ環境点 検調査
	新 雅史	アラタ マサフミ	学習院大学	非常勤講師	コミュニティ環境点 検調査
	牧野 篤	マキノアツシ	東京大学 教育学 部	教授	住環境点検統括
	岡本 玲子	オカモト レ イコ	岡山大学大学院 保健学研究科	教授	住環境点検統括
	村嶋 幸代	ムラシマ サチヨ	大分県立看護大学	教授	住民調査・ニーズ評 価・設計・解析
	岡本 和彦	オカモト カ ズヒコ	東京大学建築学科	助教	住宅地設計
	笈田幹弘	オイダミ キヒロ	東京大学 高齢社 会総合研究機構	特任研究員	子どもケア空間

	井堀 幹夫	イホリ ミキオ	東京大学 高齢社 会総合研究機構	特任研究員	福祉施設
	松永 篤志	マツナガ アツシ	東京大学大学院 医学系研究科	D 2	大槌町版介護予防体 操DVDの製作
	成瀬 昂	ナルセタカシ	東京大学大学院 医学系研究科	助教	コミュニティ環境点 検調査
	蔭山 正子	カゲヤマ マ サコ	東京大学大学院 医学系研究科	助教	コミュニティ環境点 検調査
	阪井 万裕	サカイ マサヒロ	東京大学大学院 医学系研究科	M 2	コミュニティ環境点 検調査
	岩崎 りほ	イワサキリホ	東京大学大学院 医学系研究科	D 1	コミュニティ環境点 検調査
	櫻井 美里	サクライ ミ サト	東京大学大学院 医学系研究科	M 1	コミュニティ環境点 検調査
	山本 裕子	ヤマモト ユウコ	東京大学大学院 医学系研究科	D 1	コミュニティ環境点 検調査
	三浦 由佳	ミウラ ユカ	東京大学大学院 医学系研究科	M 2	コミュニティ環境点 検調査

## 7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

### 7-1. ワークショップ等

年月日	名称	場所	参加人数	概要

### 7-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

#### (1) 書籍、DVD

- ・ 1) 富安亮輔: コミュニティケア型仮設住宅, 東日本大震災住まいと生活の復興～住宅  
白書2011-2013, ドメス出版, pp165-170, 2013.6

#### (2) ウェブサイト構築

・

#### (3) 学会（7-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・ 1) 富安亮輔: 東日本大震災におけるコミュニティケア型仮設住宅と福祉サポートにつ  
いて, Vectorworks Solution Days 2013, 品川, 2013.5
- ・ 2) 松永篤志 (講師), 大槌ぴんころ体操指導, 平成25年度大槌町さわやかウォーキン  
グの会 定期総会, 岩手県 大槌町城山体育館, 2013年4月30日
- ・ 3) 松永篤志 (講師), 大槌ぴんころ体操指導, チャレンジデー2013, 岩手県 大槌町  
役場多目的会議室, 2013年5月29日
- ・ 4) 後藤純、2013年10月25日 復興住宅と福祉のまちづくり研修会、「まちづくりと

健康・医療・福祉の連携について～コミュニティで暮らしを支える公営住宅の提案～、  
主催：宮城県仙台保健福祉事務所

- ・ 5) 後藤純、2013年9月3日 第2回コミュニティ研究会、「超高齢社会対応の復興まちづくり -Aging in Community社会の実現に向けて-」、主催：復興庁 福島県避難地域復興局
- ・ 6) 後藤純、2013年7月12日 平成25年度神奈川県社会福祉協議会 第2種・第3種正会員連絡会研修会、「コミュニティケア型仮設住宅の特徴と、設営・運営におけるポイント」、主催：神奈川県社会福祉協議会
- ・ 7) 後藤純、2013年5月29日 復興住宅と住みよいまちづくり研修会、「まちづくりと健康・医療・福祉の連携策について」 主催：気仙沼市、南三陸町及び宮城県気仙沼保健福祉事務所

### 7 - 3. 論文発表

(1) 査読付き ( 4 件)

●国内誌 ( 2 件)

- ・ 1) 富安亮輔,井本佐保里,大月敏雄,西出和彦,岡本和彦,趙晟恩,小泉秀樹,後藤純,狩野徹: コミュニティケア型仮設住宅の提案と実践, 日本建築学会技術報告集 第42号, pp.671-676, 2013.6
- ・ 2) 似内遼一, 後藤純, 小泉秀樹, 大方潤一郎 (2013). 「岩手県大槌町の仮設住宅団地における自治体制構築とボランティア・アクションの発生」 都市計画論文集, 48, 855-860

●国際誌 ( 2 件)

- ・ 1) Kazuhiko NISHIDE, Toshio OTSUKI, Ryosuke TOMIYASU: Proposal and Examination of 'Community-care Temporary-housing', MERA Vol.32, 2014.3
- ・ 2) Satoko Nagata, Atsushi Matsunaga, Chie Teramoto. (2014). Follow-up study of the general and mental health of people living in temporary housing at 10 and 20 months after the Great East Japan Earthquake. Japan Journal of Nursing Science, (in press).

(2) 査読なし ( 0 件)

(3) 学位論文 ( 1 件)

- ・ 1) 篠本 快、東京大学大学院 建築学専攻 2013年度 修士論文：団地内駐停車行動からみた駐車スペースの配置計画と運営手法－岩手県沿岸の日さ自治体における応急仮設住宅地を対象として－

### 7 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

(1) 招待講演（国内会議 3 件、国際会議 1 件）

- ・ 1) 富安亮輔: 仮設住宅地が日常を取り戻すプロセス-釜石市と遠野市の事例から-, 2013年度日本建築学会大会建築計画部門パネルディスカッション「日常へ-見えない避難生活の現場から-」, pp7-10, 2013.9
- ・ 2) 富安亮輔: 仮設住宅と福祉の連携, 都市住宅学会設立20周年記念連続シンポジウム「東日本大震災における仮設住宅の在り方を考える」, 都市住宅学会, 2013.4
- ・ 3) 富安亮輔: 岩手県の高齢者等のサポート拠点の現状と課題について, 日本建築学会

高齢者・障がい者等居住小委員会公開研究会「高齢者・障がい者の暮らしと居場所を  
考える-被災地のサポート拠点の取組みから」、建築会館, 2014.2

(2) 口頭発表 (国内会議 7 件、国際会議 2 件)

- ・ 1) ○篠本快、朴晟源、芦澤健介、金昶敏、齋藤慶伸、深井祐紘、富安亮輔、井本佐保里、栗野悠、生山翼、吉田雅史、趙晟恩、北原玲子、岡本和彦、大月敏雄、西出和彦：駐車区画の割当にみる駐車場の管理について-仮設住宅団地における駐車スペースに関する研究(その三)-、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.1~4、2013.08
- ・ 2) ○朴晟源、篠本快、芦澤健介、金昶敏、齋藤慶伸、深井祐紘、富安亮輔、井本佐保里、栗野悠、生山翼、吉田雅史、趙晟恩、北原玲子、岡本和彦、大月敏雄、西出和彦：団地内倉庫の設置から見た著従者の生活パターンについて-仮設住宅団地における駐車スペースに関する研究(その四)-、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.5~8、2013.08
- ・ 3) ○趙晟恩、西出和彦、大月敏雄、齋藤慶伸、朴晟源、深井祐紘、生山翼、金昶敏、篠本快、富安亮輔：応急仮設住宅団地内の共用空間における使われ方の変化に関する考察-仮設住宅団地における外部空間活用に関する研究(その1)-、日本建築学会大会学術講演梗概集、 pp.13~16、2013.08
- ・ 4) ○深井祐紘、朴晟源、齋藤慶伸、篠本快、芦澤健介、金昶敏、井本佐保里、富安亮輔、趙晟恩、岡本和彦、大月敏雄、西出和彦：仮設住宅の南窓周辺の活用に関する研究-仮設住宅団地における外部空間活用に関する研究(その2)-、日本建築学会大会学術講演梗概集、 pp.17~20、2013.08
- ・ 5) ○金昶敏、芦澤健介、齋藤慶伸、篠本快、栗野悠、生山翼、吉田雅史、朴晟源、深井祐紘、富安亮輔、井本佐保里、北原玲子、趙晟恩、岡本和彦、大月敏雄、西出和彦：仮設住宅棟間における舗装状況による植栽設置について-仮設住宅団地における外部空間活用に関する研究(その3)-、日本建築学会大会学術講演梗概集、 pp.13~16、2013.08
- ・ 6) ○富安亮輔、齋藤慶伸、大月敏雄、西出和彦：東日本大震災における高齢者等のサポート拠点に関する研究-岩手県を事例として、2013年度日本建築学会大会学術講演梗概集オーガナイズドセッション、E-1, pp41-44, 2013.8
- ・ 7) Kazuhiko NISHIDE, Ryosuke TOMIYASU, Toshio OTSUKI: Effects of design on inhabitants' community building- Examination of temporary-housing project in Iwate prefecture after the 2011 East Japan earthquake, The Environmental Design Research Association, Providence, USA, 2013.5
- ・ 8) 齋藤 慶伸 , 富安 亮輔 , 趙 晟恩 , 栗原 理沙 , 西出 和彦 , 狩野 徹 , 大月 敏雄 , 岡本 和彦 , 後藤 純 , 井本 佐保里 , 似内 遼一 : 5012 コミュニティケア型仮設住宅における顔見知りの広がりに関する研究(選抜梗概,福祉仮設住宅とコミュニティケア,オーガナイズドセッション,建築計画,2013年度日本建築学会大会(北海道)学術講演会・建築デザイン発表会)、学術講演梗概集 2013(建築計画), 45-48, 2013-08-30
- ・ 9) Sungwon PARK, KOREA, Construction of Temporary Housing and recovery plans after Great East Japan Earthquake, The Architectural and Urban Space(A journal specialized in architectural and urban policies), Vol.13-Spring 2014, pp.74~78

(3) ポスター発表 (国内会議 7 件、国際会議 \_\_\_\_\_ 件)

- ・ 1) 寺本千恵, 松永篤志, 永田智子. (2013). 東日本大震災10か月後の仮設住宅住民のソーシャル・サポートと心理的ストレスの関連. 日本地域看護学会学術集会講演集, 16, 51.
- ・ 2) 永田智子, 松永篤志, 寺本千恵, 新雅史. (2013) 仮設住宅住民の震災10ヵ月後と20ヵ月後の追跡調査 属性と主観的・精神的健康. 日本公衆衛生学会総会抄録集, 72, 527.
- ・ 3) 寺本千恵, 松永篤志, 新雅史, 永田智子. (2013). 仮設住宅住民の震災10ヵ月後と20ヵ月後の追跡調査 団地内友人との交流. 日本公衆衛生学会総会抄録集, 72, 527.
- ・ 4) 松永篤志, 寺本千恵, 新雅史, 永田智子. (2013). 仮設住宅住民の震災10ヵ月後と20ヵ月後の追跡調査 外出状況と精神的健康日本公衆衛生学会総会抄録集, 72, 527.
- ・ 5) 永田智子, 寺本千恵, 松永篤志. (2013). 仮設住宅住民の震災10ヵ月後と20ヵ月後の追跡調査 孤立感の変化および個人属性・団地内の交流の影響. 日本看護科学学会学術集会講演集, 33, 677.
- ・ 6) 松永篤志, 寺本千恵, 永田智子. (2013). 仮設住宅住民の震災10ヵ月後と20ヵ月後の追跡調査 外出状況の変化に影響する要因. 日本看護科学学会学術集会講演集, 33, 678.
- ・ 7) 松永篤志, 寺本千恵, 永田智子. (2014). 東日本大震災被災地における同じ地区内の仮設住宅住民と自宅生活住民の精神的健康. 第2回日本公衆衛生看護学会学術集会講演集, 246.

#### 7 - 5. 新聞報道・投稿、受賞等

##### (1) 新聞報道・投稿 ( 5 件)

- ・ 河北新聞 (2013年7月10日、26面ワイド東北) 「なじみの曲で介護予防を」
- ・ 岩手日報 (2013年6月25日) 「町の未来 生徒が発想」
- ・ 朝日新聞 (2013年9月3日) 「大槌の家賃相場 戦略会議委員長が問題視」
- ・ 河北新報 (2014年1月9日) 「復興定住促進に重点 人口流出止まらず 岩手・大槌町」
- ・ 岩手日報 (2014年3月16日) 「高校生の復興アイデア予算化 大槌町が取り組み支援」

##### (2) 受賞 ( 件)

.

##### (3) その他 ( 4 件)

- ・ おおつち災害エフエム (2013年7月1日、まいにちおおつち) 「大槌ぴんころ体操の紹介」 (出演: 松永篤志)
- ・ NHK教育 (2013年9月2日) 「Rの法則」: 「岩手県立大槌高校プロジェクト」
- ・ NHK教育 (2013年12月26日) 「Rの法則」: 「岩手県立大槌高校プロジェクト続編」
- ・ NHK・総合 (2014年3月9日) 「震災から3年 特集 明日へ支え合おう」

#### 7 - 6. 特許出願

##### (1) 国内出願 ( 件)

##### (2) 海外出願 ( 件)